

出光タンカー株式会社
三等航海士 西村 勇輝

安全のためのコミュニケーション

次席三等航海士として VLCC に乗船し、約 3 カ月が経過しました。この間、私自身も含め、本船の乗組員に怪我や事故はありませんでした。一般の方には当たり前のことのように思えるかもしれませんが、船内作業では当たり前のことではないのだと実感しました。

乗船して最初に言われた言葉は、「怪我をするな、させるな。」でした。最初は「何故、今更。」と思いましたが、乗船 3 カ月が過ぎ、船内に潜む身近な危険は陸上とは比較にならないくらい多いということを知りました。

これまで生活の中で大きな怪我をしたり、危うく怪我をしそうになったりという経験は殆どありませんでした。「安全」を深く意識せずに生活しても、怪我や事故に遭遇することはそう多くはありません。しかし、船内生活は陸上での生活とはまったく異なるものだ痛感しました。たった 1 回の機器の操作ミスで大けがをしてしまう、または大事故を引き起こす可能性があります。

そのような環境で働く我々が事故や怪我なく安全に作業を行うためにはどうすればいいのか。安全を保つ為に日々の点検や整備、保護具着用の徹底、正しい手順を守るなど様々な取り組みをしています。その中でも特に適切なコミュニケーションを取ることが重要だと考えます。コミュニケーション不足は作業のミスを誘い、それが怪我や事故に繋がりがねないのです。

適切なコミュニケーションを取るために有効な手段の 1 つ目は、命令を受けたら必ず復唱し、作業が終われば報告することです。復唱は作業を行う上で基本的なことですが、これを毎回確実に行うことで、指揮者と作業員間で適切なコミュニケーションを取ることができ、指示の聞き間違いなどによるミスを減らすことができます。特に私が乗船しているような混乗船では、英語でコミュニケーションを取らなければならないため、指示を聞き間違えたり、異なった意味に解釈してしまう可能性が高くなります。そのため、指示を復唱し、複数の人で確認することは特に有効になります。

実際に私が体験した例を挙げます。入港のため、私が船橋に立っていた時のことです。船長がウイングから、トランシーバーを使って操舵手に対して舵角を指示する場面がありました。その直後、操舵手は復唱を行わないまま、指示された舵角とは逆に舵を切りました。そのときは周りにいた航海士がすぐに気づき、大事には至りませんでした。もし誰も気が付いていなければ非常に危険

な状況に陥っていたと思います。復唱さえ確実に行っていれば、このようなミスは未然に防げたのではないのでしょうか。復唱は誰でも簡単に行うことができ、ミスを減らすことができます。

適切なコミュニケーションを取るための2つ目の有効な手段は、小さなこともお互いに報告し合い、作業者全員で情報を共有することです。

これも実際に私自身が体験した例を挙げます。私が先輩の三等航海士と一緒に当直に入っていた時のことです。私が双眼鏡を使って見張りをしていたときに、1隻の漁船が本船に近づいてくるのを発見しました。隣では三等航海士も見張りをしていたので、わざわざ報告する必要はないだろうと勝手に判断し、私は漁船の発見を報告しませんでした。しばらく時間が経ち、漁船は次第に近づいてきましたが、三等航海士は避けようとはしません。さらに漁船が接近し、少し不安になった私が三等航海士に尋ねてみたところ、漁船の存在に気が付いていませんでした。その後、すぐに避航動作を取り、危険な状況には至らなかったのですが、もっと早い段階で報告していれば更に安全な距離を保つことができていました。

- ・気が付いたことがあれば、小さなことでも報告し合い情報を共有する。
- ・既に知っているだろうと勝手に判断しない。

今回例として挙げた航海当直だけでなく、どんな作業においても、全員で情報を共有し危険なポイントを把握することは重要であると考えます。

初めての乗船で私が安全のために重要だと考えた指示の復唱と情報の共有について述べましたが、最初にも述べたように、船内で生活する我々は常に危険と隣合わせです。まずはそのことを理解しておくだけでも危険な状況に遭う可能性は低くなるのではないのでしょうか。

船内で生活するうえで、どれだけ安全を意識していても、意識しすぎということはないと思います。

以上